九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[096] 語文研究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/10170

出版情報：語文研究. 96, 2003-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《会員著書紹介》

高橋敬一・不破浩子・若木太一 編
和泉索引叢書50
『交 隣 須 知』本文及び索引

近世期に作られた朝鮮資料の一つである『交隣須知』は、日本語文と朝鮮語文の対訳という体裁をとっており、朝鮮語学習書として近世から明治期にかけて広く利用された。成立には、対馬の朝鮮語通事と雨森芳州（寛文八〈一六六八〉年―宝暦五〈一七五五〉年）が関与したという。

現在『交隣須知』の諸本としては写本十種、刊本四種が知られているが、本書は、それらのうち長崎大学武藤文庫蔵の写本（長大本）を底本として、以下のような内容で構成される。

Ⅰ　本　文
　交隣須知　巻一（影印）
　交隣須知　巻三（影印）
　交隣須知　巻四（影印）
Ⅱ　解　題 ……〈高橋敬一〉
　一　書誌の概要
　二　長大本の特色
Ⅲ　雨森芳州年譜 ……〈若木太一〉
　一　芳州の経歴
　二　『交隣須知』をめぐる諸問題
　三　「類解」について
　四　『交隣須知』の成立とその周辺
　五　雨森芳州略年譜（朝鮮語習得にかんする編纂、著述）
Ⅳ　翻字・索引 ……〈不破浩子〉
　一　『交隣須知』項目対照表
　二　『交隣須知』本文翻字
　三　見出し漢字索引

※〈　〉内は担当者

『交隣須知』を言語資料として用いた研究は、従来それほど多くない。その理由は、未だ諸本の整備が不十分であることにある。本書に見られるような『交隣須知』の体系的な書誌的研究が進められることで、言語資料としての『交隣須知』研究のいっそうの進展が期待される。

（平成十五年二月　和泉書院　A5版　三九九頁　九、〇〇〇円）

中野三敏 著
『本 道 楽』

先に『書誌学談義　江戸の板本』（平成七年刊　岩波書店）を世に問うた著者が、これまでの書物収集にまつわる思い出を一冊にまとめたのが本書である。紙魚（しみ）の生涯になぞらえた

各章は以下の通り。

序　章
第一章　紙魚の卵
第二章　紙魚の孵化
第三章　紙魚、名古屋へ往く
第四章　紙魚の帰郷
終　章　紙魚供養

第一章では、早稲田大学での修学時期を、第二章では、正則高校勤務時期、第三章では、愛知淑徳短期大学勤務時期を、第四章では、九州大学勤務時期を振り返る。随所に盛り込まれた、名だたる蔵書家・愛書家・老舗古書肆から直接見聞した、書物に関する知識やエピソードの数々は掛け値なく面白い。登場する人物は、丸山季夫、森銑三、三村竹清、中村幸彦、尾崎久弥、横山重、長沢規矩也、本郷の木内書店、神保町の大屋書房、名古屋の藤園堂、京都の竹苞楼等々、錚々たる顔ぶれである。

序章において、著者は本書を自叙伝と位置づけているが、『書誌学談義　江戸の板本』で披瀝した該博な知識をいかにして身につけたのか、それを具体的に示している意味において、本書は最も実践的な書誌学のガイドブックと言うべきものなのであろう。

著者の「本道楽」は、今もなお健在である。今後、本書の第二弾、第三弾が期待されるところである。

（平成十五年七月　講談社　A5版　二七八頁　二、三〇〇円）

今井源衛 著
『今井源衛著作集　第三巻
紫式部の生涯』

全十四巻の著作集のうち、本巻には吉川弘文館の人物叢書として上梓された『紫式部』（昭和四十一年初版）と、その他紫式部の伝記に関わる論考を収める。細目は次の通りである。

紫式部
はしがき　新装版にあたって　1 その時代
2 家系　3 生い立ち　4 青春・未婚時代
5 結婚生活　6 寡居時代
7『源氏物語』の起筆　8 宮仕え生活
9『源氏物語』の展開と『紫式部日記』
10 晩年　11 人としての紫式部
12 女性観・教育観
13『源氏物語』の享受と紫式部観の変遷
関係諸系図　略年譜
紫式部の生涯

紫式部の父系
紫式部の出生年度
紫式部本名香子説を疑う
源氏物語執筆の動機
紫式部「道長妾」の伝承について
晩年の紫式部
晩年の紫式部補説
晩年の紫式部再考
紫式部集の復元とその恋愛歌
源氏物語と紫式部集
紫式部日記における作者の自我
紫式部日記に見える「才（ざえ）」
紫式部非作者説など
『紫式部』を書いたころ

『紫式部』の執筆に際しては、本巻所収の「『紫式部』を書いたころ」によれば、与謝野晶子・岡一男両氏の伝記研究、とりわけ岡氏によって著された『源氏物語の基礎的研究』（東京堂、昭和二十九年）と氏は「日夜格闘する形となった」。その手法については「要するに資料を博捜し、また岡氏の採用した資料を再検討し、また岡説で不動の部分と然らざる部分とを区分けして、後者についてどこまで書き直せるか。また岡氏の盲点は何か。それを見つけてくさびを打ち込むこと」に尽きたという。

また後半の諸論考も、角田文衛氏によって提唱された紫式部香子説に対する批判を述べる「紫式部本名香子説を疑う」や、「老眼」という医学的根拠から式部の出生年度を天禄元年以前と逆算する「紫式部の出生年度」など、いづれも多くの示唆を含む。『紫式部日記』考察の過程では、氏も調査の中心となった島原松平文庫本の本文がいちはやく採り入れられている。

工藤重矩氏による解説には次の如く述べられる。「今後、紫式部伝の研究において新説を立てるのは容易なことではないが、もし一歩を進めることがあるとすれば、本巻の精読の中から生まれてくると言って過つことはあるまい」。

（平成十五年七月　笠間書院　A5判　三七二頁　九、〇〇〇円）

岩倉さやか 著
『俳諧のこころ――支考「虚実」論を読む』

各務支考は、近世俳諧史において、初めて体系的な理念構築を行った俳人である。本書は、その支考の主著『俳諧十論』の基本的な意味・構造を見定めることを通じて、美濃派の俳諧活動およびその実作の志向するところを明らかにしようとした。全体の構成は以下の通り。

序章　俳諧とは何か
第一節　俳諧の可能性
第二節　俳諧の意味と歴史
第三節　芭蕉との出会い
第一章　俳諧のこころ
第一節　虚実の基本的な構造
第二節　虚の顕現と時宜の問題
第三節　人　和
第二章　こころの結実
第一節　平生の俳諧
第二節　「さびしき」中の「おかしき」
第三節　死と再生
結語に代えて
資料　俳諧十論附序

俳諧史における蕉風俳諧の位置を論じた序章、「虚実」「時宜」「人和」の基本概念を軸に、支考俳論の本質を探ろうとした第一章、そして美濃派の個々の作品を鑑賞評価した第二章。これら三つの章は、各々論の趣の異なるものではあるが、それらは相互に連関し補い合って、全体として一つのことがらに向かう。すなわち、支考は蕉風俳諧の本質が「俳諧のこころ」を知り、それを重んじたところにあると考えていたが、その「俳諧的な心」とは、無限なる「虚」の働きに貫かれ言葉を発するときの、心そのものの開花し充実したあり方を意味していたということである。

句作の現場に即しつつ、言葉というものの根源にまで思索を深めていった支考の俳論を、普遍的な文芸論・言語論として捉えた一書である。

（平成十五年八月　ぺりかん社　二三八頁　二、八〇〇円）

川平敏文 著
『近世兼好伝集成』

『徒然草』は近世初頭より爆発的に流行し、それに伴いさまざまな兼好像が江戸時代を通じて造形された。『徒然草』享受史という視点で近世文学研究に新たな道を切り開いてきた川平氏が、その多様な兼好伝の中から四篇を精選して成ったのが本書である。収録する作品は以下の通り。

『種生伝』は兼好の生涯を歌物語風に綴った擬古物語であり、ややもすれば「好色法師」と批判される兼好の恋愛譚を、発心にいたる一因縁として上手に転化している。

『兼好諸国物語』は注釈書『徒然草集説』で知られる閑寿の作。各条に閑寿による注釈を付した本作品は、徒然草学者による古典入門書という性格を有し、「まことしき隠者」という兼好像を描く。

『奈良比野岡』は兼好に縁の深い京都双ヶ丘長泉寺の僧利微の手による。上巻は『園太暦』偽文、下巻は『吉野拾遺』等の断片的な兼好伝に基づいて編まれたもので独自の視点には乏しいが、恋愛譚を排除することで「まことしき隠者」としての兼好像をより強固にしている。

『兼好法師伝記考証』は国学者として著名な野々口隆正により、江戸中期以降に現出した「南朝忠臣」という兼好像を受けて述作された。学問的考証と創作的虚誕が混在する内容は、多数の挿絵を用いた半紙本五巻五冊という体裁とも相俟って読本的な世界観を形成する。

また参考文献として兼好像造形の母体となった『園太暦』偽文を併録する。

本書を通読すると、兼好に関する限られた素材が時代を触媒として実に多彩な兼好像を造成していることを看取できる。兼好像の変遷を通して時代の空気を窺うことこそ編者の意図したものであり、それは巻末の詳細な解説により明確に方向付けられる。各時代の『徒然草』享受が兼好像の創造に直結している様を如実に示す一書である。

（平成十五年九月　平凡社東洋文庫719　B6判　四一六頁　三、〇〇〇円）

今井源衛 著

『今井源衛著作集　第四巻　源氏物語文献考』

本巻には『源氏物語』に関わる多彩な資料論を収める。細目は次の通り。

『源氏物語奥入』の成立について
『源氏物語奥入』
神宮文庫蔵『源語古抄』本文と解題
了悟『光源氏物語本事』について
『幻中類林』と『光源氏物語本事』
古系図をめぐって
続編「釣殿の后」
『源氏物語』の注釈書――『河海抄』のこと
島原松平文庫蔵『光源氏一部歌』解題
『光源氏一部歌』の「口伝」と「秘説」
『山頂湖面抄』解題（附・諸本記事対照表）
『今はむかし物語』翻刻と解題
『源氏のゆふだすき』と『源氏六十三首之歌』
島原松平文庫本『源氏長歌』翻刻と解題
島原松平文庫本『十番艶書合付立聞』と『女房艶書合』翻刻と解題
女子教訓書および艶書文学と『源氏物語』

第三巻の紹介にも触れたように、昭和三十六年頃、氏は中村幸彦氏らと共に島原松平文庫の本格的調査を主導した。松平忠房旧蔵の豊富なコレクションの発見は、田坂憲二氏の解説に云う「研究者としてのターニング・ポイント」であり、歴史社会学派と呼ばれていた氏は、以後文献学者としての成果をも次々と発表することになる。

そこで新たに発見された貴重資料、就中『光源氏物語本事』については、式子内親王本・比叡法花堂本など『源氏物語』の諸伝本にまつわる記述や、定家本以前とおぼしい『更級日記』の逸文（「ひかる源氏の物かたり五十四帖に譜くして」）などが含まれ、それらの詳細が本巻所収の「了悟『光源氏物語本事』について」、「『幻中類林』と『光源氏物語本事』」に報告されている。

尚、松平文庫調査のいきさつについては、「文庫めぐりの思い出」として本著作集第十二巻に所収予定であるという。

（平成十五年九月　笠間書院　A5判　三八〇頁　九、〇〇〇円）

上野洋三 著
『元禄和歌史の基礎構築』

本書は、著者の四半世紀にわたる和歌史研究の集成である。本書の構成を通覧すれば、この紹介文など贅言にすぎないことはご理解いただけるかと思う。構成は以下の通り。

Ⅰ　近世和歌史再考

第1章　江戸時代前期の歌と文章／第2章　堂上と地下――江戸時代前期の和歌史――／第3章　寛永の京都文化

Ⅱ　地下歌人の成長と充実

第1章　『歌枕名寄』の板下筆者／第2章　有賀長伯の出版活動／第3章　跡部良隆の『近代一人一首』／第4章　『若むらさき』の歌風

Ⅲ　堂上歌論の再構築

第1章　元禄堂上歌論の到達点――聞書の世界――／第2章　『渓雲問答』の成長／第3章　歌論と俳論／第4章　歌俳趣向論

Ⅳ　元禄の和歌史と芭蕉の表現

第1章　『挙白集』と『奥の細道』／春雨・蜂の巣・蜘蛛の囲／第3章　芭蕉と同時代の歌壇

Ⅴ　和歌の理想のありか

第1章　柳沢吉保と『松蔭日記』／第2章　百年の交誼

付　近世歌書刊行年表――寛永～元文――

第Ⅰ部は、旧来の「近世和歌史」に対して著者独自の見取り図を示し、様々な視座から近世前期和歌史に光をあてている。更に第Ⅱ部は、近世前期における出版の意義を問うもの

で、巻末に付載する「近世歌書刊行年表――寛永～元文――」を合わせみる必要があろう。

第Ⅲ、Ⅳ部は、聞書の詳細な解読から、「まこと」論へ言及する。また歌論と俳論とを同じ俎上に載せることで「元禄」という時代の風を検証・追及している。

第Ⅴ部は、昨年度の大学院演習の題材として院生を苦しめた『松蔭日記』を取り上げ、その「和文」の文学的価値、当代における和歌のあり方、文学史的意義を論じる。これまた贅言にすぎないが、すべての文学研究者必読の書である。

尚、巻末には五十六頁に及ぶ、「近世歌書刊行年表――寛永～元文――」索引（書名、人名、書肆名）、人名、書名索引を附し、本書の資料的活用の一助となっている。

（岩波書店　A5判　平成十五年十月　三六八頁　一三、〇〇〇円）